

よろこびにたどり着くまで

穏やかに流れる広い川を越えると、定規で引いたような道路がどこまでも続く。道の両側には真っ平らな農地が限りなく広がっている。農地の間には、灰色の小屋と赤い塗装がところどころ売げたトラクターがポツリポツリと見える。農道に降り立つと、遮るものがないので強風にあおられる。前後左右に広がる田んぼいっばいに稲の刈り株が整然と並ぶ。刈り株を地平線までたどっていくと、視線は勢いよく回る風力発電の風車と、山頂が雪で覆われた山にぶつかる。「日本の農村ではないみたいだ」と、この地を訪れる誰もが思うだろう。秋田県大潟村。55年前まで、この地は八郎潟という湖の底だった。

日本農業のモデル農村

八郎潟ではかつて、シラウオやワカサギな

どの魚が豊富に獲れたので、農業と水産業を組み合わせて生計を立てている家が多かった。しかし、戦後の経済発展とともに鮮魚の流通網や保存技術が発達すると、魚の希少性が下がり価値が下落。周辺地域の長男は農業を継ぐ一方、次男、三男は仕事がなくなってしまった。彼らの働き先を確保し、戦後の厳しい食糧危機を解決するために八郎潟の干拓が始まった。当初は1戸あたり2.5haの農地を割り当て、4,700戸を入植させる計画だった。

しかし、干拓計画が始動してから数年の間に国内情勢は急激に変化した。高度経済成長期にさしかかり、農業と工業の賃金格差が始まったのだ。この格差を縮めるために、国は規模拡大と機械化で農家の収入を上げ

ようと考えた。こうした近代的な農業の実践地として、大潟村には「日本のモデル農村」という新しい役割が与えられた。いつしか、周辺農家の次男三男の働き先を確保する、という当初の目的は消えていった。

1964年、干拓の地に大潟村が誕生。1戸あたりの割り当て面積は2.5haから10haに拡大され（最終的には15haにまで拡大）、全国から熱い志をもった若者たちが入植した。第一次入植者の富田博文さん(76)は語る。「俺は鹿児島から来たんだけど、山と田んぼを合わせて1haしか土地がなかったから、10haの田んぼは魅力的だったね。田舎ではみんな貧乏してた。ここでは外国式のコンバインやトラクターも使える。家も国が準備してくれて半額補助だ。おまけに一年訓練してもらって、「どうぞ百姓やってください」っ

という環境。こんなところでやれなければどこで食ってけるのかって思ったよ」。困窮する日本国民にカロリーを供給し、新時代の日本農業のモデルになる、大いなる使命を抱いた大潟村の歴史の幕が上がった。

松橋拓郎さん(32)は、そんな大潟村の入植者三世だ。「地球規模で考えて、日本で農業をやる意味がありますか？と聞かれたら論破できる自信はない。カロリーを供給するための農業なら日本でやる意味はあるのだろうか」。彼がそう語りクワを下ろすのは、日本人にカロリーを供給するために生み出された農村だった。

“小さい農業”に光がある

名門・早稲田大学で、松橋さんは教師にな

るという夢を胸に学んでいた。冬、ポータ部の合宿場に実家の米を差し入れすると、部員たちがうまい、うまいと大喜びで食べてくれた。その様子を写真に撮って送ると、両親も大喜びだった。食べる人もつくる人も喜んでる姿を見て、こんな関係性をつくられるとしたら農業は素晴らしい仕事だと思った。この頃から、彼は農業に惹かれていく。ある授業でのこと。教壇に立つ先生が、日本農業の厳しさについて懇々と話していた。松橋さんは、「農業って、東京の大学で案じられるほど価値があるんだ」と驚いた。そして大学で国内外の農業について学ぼうことに、「日本農業が衰退していく中で、その解決策が国内にないなら、海外の農業を見たい」という想いが募っていく。

当時、大学の友人から「大潟村のこと載って

るよ」と見せられる新聞や雑誌の記事は、「大潟村の農家の10%は経営難だ」と、村の農業の凋落ぶりを伝えるものばかりだった。“日本のモデル農村”だったはずの大潟村の状況は、開村して40年で暗転していた。大潟村のやり方は日本には馴染まないのかもしれない。それならば、大潟村が手本にしたアメリカ型の“大きい農業”とは対極の、ヨーロッパ型の“小さい農業”に光があるのではないか。そう考えて彼が最初に目をつけた国はオランダだった。オランダは、九州ほどの国土であるにもかかわらず、アメリカに次ぐ世界2位の農産物の輸出額を誇る。オランダでの農業研修プログラムを見つけたが、2年以上の農業経験が参加条件だった。「農業経験は無いですが、実家が農家なんで大丈夫です！」と直訴したが、もちろん受け入れられるはずがなかった。

その後、一冊の本が海外への道を開く。タイトルは「イタリア有機農業の魂は叫ぶ」。イタリアにおける有機農業の先駆者、ジーノ・ジロロモーニ氏の半生と思想が記された本だった。ジロロモーニ氏はイタリアの小さな農村に生まれ、村長を務めながら有機農業を実践。その後、有機農業専門の農業協同組合を設立し、農産物をパスタやオリーブオイルに加工して世界中に輸出している。イタリア農業の研究者のつてをたどって、現地コーディネーターにジロロモーニ氏の会社で勉強したいと伝えると、志望理由書を書いてみるよう勧められた。



【秋田県大潟村東】

文=高橋博之、成影沙紀 写真=玉利康延

4月3日
6°C

特集 アスパラガス

